

中山道落合宿歴史案内図 -2-

中山道落合宿歴史案内図

白木番所跡・下馬庚申堂跡
 下桁橋を渡り滝場に入る左側の石垣の上にある民家の辺りが寛文9年(1669)から享保12年(1727)まで白木番所が置かれていた所である。又、庚申堂(金剛院)も江戸の初め頃から幕末頃までこの辺りにあり、お堂の前は下馬して通らないと落馬する程神威が強い庚申様で、誰言うともなく下馬庚申と呼ばれていたと伝えられているが、今は医王寺に移し祀られている。



広重画/落合宿

落合橋(下桁橋)
 この橋は、欄干があり、長さは30m、巾4.6m、両岸より材木で組上た見事な橋と濃陽徇行記にあり、当時の落合宿を代表する風景の場所として広重の絵にも描かれているが、洪水での流失破損が度重なり、旅人の通行に支障が多く、中山道付け替えの原因になった橋である。



下桁橋



落合の石畳
 古い時代に道の荒れを防ぐために敷かれていた石畳も、明治に入り通行に不都合と取り除かれてしまったが、昔の姿を留めていた部分が、昭和39年に岐阜県の史跡指定を受け保存されてきた。その後の中山道整備事業で鬱蒼とした木立の中800mにおよび、昔ながらの石畳道が再現されている。



高札場跡
 滝場と横町の境辺りに高札場があった。御判形(ごはんぎょう)ともいいこの付近をごはんぎょうばと呼んでいた。

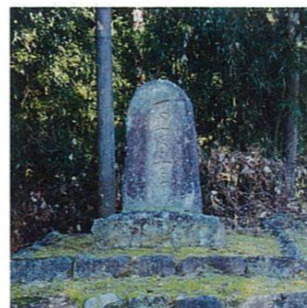
付替え道の分岐点
 中山道が湯舟沢経由に付け替えられた寛保元年(1741)から30年間は、ここが湯舟沢方面へ向かう中山道の分岐点であった。

消えた十曲峠の道
 落合橋から医王寺までの道は十曲がりて表現されている様に屈曲の多い急坂の道であった。湯舟沢経由の道が元に戻った折り、落合橋から医王寺まで緩やかな山中坂へ迂回する道を開き九十九折の坂道は魔道となる。



山中の医王寺
 この寺は瑠璃山医王寺といい、行基作の薬師如来を本尊に数多くの仏像が祀られ、別名を山中薬師といい、狐膏葉で古くから馴染み深い寺である。境内には「梅が香にのつと日が出る山路かな」の芭蕉の句碑、三重の層塔、大きく枝を張る枝垂桜などがあり、四季を通じ風情豊かな山寺である。

かねいりば 鐘 鑄り 場
 石畳を抜け大久手用水を越えた辺りは「かねいりば」とか「かねば」と呼ばれている。寛保2年(1742)に医王寺の梵鐘を鑄造した所から、その名がついたといわれている。



新茶屋一里塚の碑

新茶屋の一里塚
 一里塚は、1里(3.9Km)毎に道の両側に土を盛り塚を築いて道程を表すために江戸幕府が造らせたものである。ここは、江戸の日本橋から83番目の一里塚であり、西側は復元したものであるが、東側の山肌にある塚は、少し崩れているが大きさや形はほぼ昔のまま残っていたものを、平成5年に発見し、整備したもので斜面に残る塚では貴重なものという。塚上の木は「榎」である。

「これより北木曾路」の碑

中山道落合宿歴史案内図 -1-

落合宿の概要

この宿場は、江戸の板橋から44番目、村のほぼ中央にあり、町の東西両入口に桁形がある町は東から、上町・中町・下町まで三町三五間(390m)道幅2~3間(4~5m)両側に町並が続き、町のほぼ真ん中辺りに本陣、道を挟んで脇本陣があった。

道の真ん中には上町から下町まで用水が流れており、水路の上には常夜燈が建てられていたという。

宿場は、文化元年(1804)に44戸、同12年(1815)にも45戸を焼失する二度の大火に遭って、宿場の重荷に加え、火災後の苦しい生活の様子が、

「小駅にして貧戸多し、宿内七十戸ほどあり左右に旅籠多く建ちならび近來家ことごとく破壊して見ぐるしき宿場也」

と、濃陽徇行記に留められている。

村は、福島の子村家、久々利の千村家の二代官の均等支配地であった。

村高は、太閤検四百八十石二斗一升。
庄屋2・問屋場2 (代官の下に1つづつ)
天保の頃(1830~1843)の宿場は、
戸数75戸 人口370人 旅籠屋14軒



おがらん様

お伽藍さま

ここは、木曾義仲の家臣落合五郎兼行の館跡といわれ、五郎の霊を始め、五郎の創建といわれる愛宕神社、明治の後期に村内各地から集められた天神様や山の神が祀られる神々の社。又、縄文時代の石器や土器の破片、住居跡、平安時代の柱穴遺構などの発掘で知られる五郎遺跡でもあり、東山道との関わりも注目され多くの歴史を秘めて興味を誘うお伽藍の丘である。

天狗党の熊谷三郎の墓
天狗党が京都へ向かいこの宿場を通過したおり、党規に違反した熊谷三郎が惨殺された。それを哀れんだ地元の人々により西山墓地に葬り墓碑を建て供養が続けられている。

卯建

隣家との境の壁を屋根の上までのばし、その壁の上に屋根を付けたもので防火壁の役目をする。

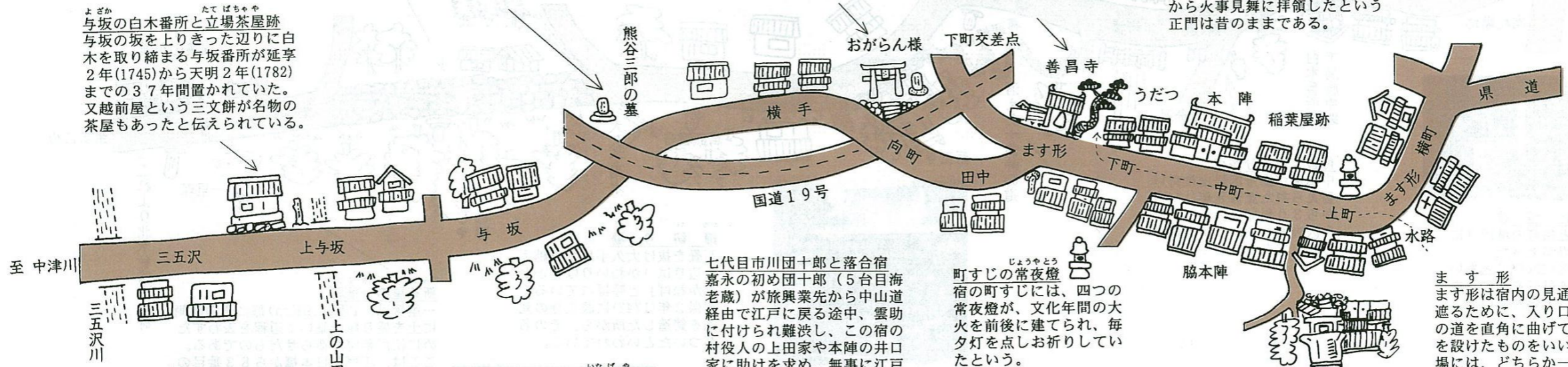


本陣

本陣は町の中ほどにあり、大名や高貴の方の宿である。建物の内部は、上段の間を奥にその前には幾つもの部屋があり、外からの侵入を防ぐ工夫が施され、抜け穴まであったという。明治14年に、今までの板葺平家の建物を、土蔵造二階建に立て直しているが、玄関から上段の間までの内部、加賀の前田侯から火事見舞に拝領したという正門は昔のままである。

善昌寺

この寺は喜翁山善昌寺といい本尊は釈迦牟尼、境内には宿内にあった常夜燈(文化10年-1813)が移転して建てられている。又門前にある松を門冠の松路上の松とも呼んでいる。



与坂の白木番所と立場茶屋跡
与坂の坂を上りきった辺りに白木を取り締まる与坂番所が延享2年(1745)から天明2年(1782)までの37年間置かれていた。又越前屋という三文餅が名物の茶屋もあったと伝えられている。

七代目市川團十郎と落合宿
嘉永の初め團十郎(5台目海老蔵)が旅興業先から中山道経由で江戸に戻る途中、雲助に付けられ難渋し、この宿の村役人の上田家や本陣の井口家に助けを求め、無事に江戸へ着くことができお札に贈られた礼状や品物が上田家(現信義氏)に伝えられている。

町すじの常夜燈
宿の町すじには、四つの常夜燈が、文化年間の大火を前に建てられ、毎夕灯を点しお祈りしていたという。明治13年(1880)の道路普請により、この一基を残し他の常夜燈はお伽藍様や善昌寺に移転された。

ます形
ます形は宿内の見通しを遮るために、入り口辺りの道を直角に曲げて死角を設けたものをいい、宿場には、どちらか一方の入口にあるのが普通であるが、この宿は東西の両入口にあったという。

高福寺

宿場通りから、50m程南へ入ったところにあり、阿弥陀如来を本尊に祀る浄土宗の寺で中央山高福寺といい古い時代の創建である。境内には徳上人の名号碑のほか仏像が沢山祀られており境内に続く墓地には、俳人嵩左坊の墓もある。

小説「夜明け前」の稲葉屋跡
半蔵の内弟子、林勝重の生家跡である。勝重の本名は、鈴木弘道といい鈴木家9代目を継承した人、屋号は泉屋といい造り酒屋を営んでいた。又、俳諧美濃派の宗匠嵩左坊の生家でもあり、町並の中でも一際風格を残す名家であったが、家主が他市に移り、老朽が進み近年取り壊された。



与坂の立場跡

